

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第7章 キリストの生涯と働きにおける祈り③



小さな子どもたちのための祈り

変貌山での祈り

ペテロのための祈り



小さな子どもたちのための祈り

弟子たちは、イエスがご自分の時間をどのように使われるべきか、どのような人々のために働かれるべきか、自分たちはわかっていると感じていました。彼らの優先順位の中で子どもたちがはるかに低いところに考えられていたのは確実です。そのため、親たちと小さな者たちがその場に入り込んでくると彼らを叱責しました。イエスが割って入ってくださらなければ、子どもたちはどのような心の傷を抱えてしまったことでしょうか。イエスは彼らが生涯、忘れられないような形で触れてくださいました。

そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちが連れて来られた。ところが、弟子たちは彼らをしかった。しかし、イエスは言われた。「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに來させなさい。天の御国はこのような者たちの国なのです。」そして、手を彼らの上に置いてから、そこを去って行かれた。

（マタイ 19:13-15）

ここに見てとれるのは、連れて来られた小さな子どもたちのためにイエスが祈っておられる、心温まる場面だけではありません。これはまた、あらゆる親にとっての美しい先例でもあるのです。親である人々と子どもたちのための働きに携わる人々とは、自らもイエスを代表する者（訳注*：原文は「大使」）として、神の特別な働き

かけの中にあるそれらの者たちを愛し、祝福することができるのです（マタイ 18:5-6、マルコ 9:42 参照）。

ここでイエスは、子どもたちのためにどのような祈りをされているのでしょうか。その内容は語られていません。聖書にあるのはただ「手を彼らの上に置いて」というだけです。子どもたちが連れて来られたのは「イエスに手を置いて祈っていただくため」とあり、イエスが彼らのために祈られたのは明白だと思われまゝ。当時の習慣から考えられることは、祈りは祝福の一つの形であったということです。自発的なものであったとしてももっともなことですし、モーセがアロンとその息子たちにイスラエルの子らについて宣言するよう指示した、次のような祝祷であった可能性もあります。「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように」（民数記 6:24-26）。この場面でイエスに触れていただいた子どもたちの歩みは、その後、どのような影響を受けたことでしょうか。何人かは初代教会でも熱心な信徒になったと思うのは考えすぎでしょうか。

変貌山での祈り

変貌山でのイエスの祈りは、特に興味深いものです。この時までには、公生涯のお働きにおいて十字架が大きく浮かび上がってきていました。群衆の人気は少しずつ収まってきており、イエスも既に、ご自分の今後に降りかかる恐ろしい出来事について予告しておられました（ルカ 9:22 参照）。暗き夜の体験のもたらす影が次第に深まっていくとしていたのです。

おそらく、三人の弟子たちと山に登られた様子は、アブラハムが神から一人息子を捧げよとの指示を受けてモリヤの山に登った様子と似ていたことでしょう。そこにはおそらく、普段とは違う、圧倒されるような空気が漂っていたことでしょう。会話もほとんど無く、群衆のために働く時のような高揚感もまったく無かったことでしょう。それでも彼らはまさに、それまで一度も体験したことのないような、通常ではあり得ない、素晴らしい祈りの時を体験しようとしていたのです。そのような祈り会は、それまでも、それ以降も、この地上に存在することはないのです。

イエスの生涯における他の様々な場面と同様、イエスの祈りの内容として、書かれたものは何も残されていません。ギブソンは次のように推測しています。

あの孤独な丘の上で、後にはあの園にて、イエスの心に「父よ、もしもできますならば」という叫びがあったということ、私たちは畏敬の念を抱きつつ想像せずにはいられようか。上への道がまさに今、開いてさえいればよいものを。神の国はユダヤ、サマリヤ、ガリラヤ、辺境の地域に向けてはまだ語られていないのですか？ 教会はまだ設立されていないのですか？ 使徒たちにはまだ権威が与えられていないのですか？ ならば、戻ること、エルサレムに戻るものが絶対に必要なのですか？ 勝利を得るためにではなく、最後の屈辱と敗北を受け入れるために。

イエスが山に登られたのはモーセとエリヤと交わりを持つためではありませんでした。もちろん二人とはご自分の旅立ち（文字通りには「エクソダス」、ご自分の死と復活、昇天）について話をされましたが、本当の目的は父なる神と語られることにより、ご自分の霊の中に天からの力をいただくことにありました。イエスの変貌の祈りは三人の弟子たちに、忘れることのできない衝撃をもたらしました。彼らは完全に変えられてしまったのです。イエスに愛された弟子ヨハネは、「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄

光である」(ヨハネ 1:14) と宣言していますが、これは、少なくとも一面においては、あの山上での忘れ得ぬ時のことを語っているのです。ペテロも同様に、この体験が自らにもたらした甚大な影響について宣言しています。「キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」

私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです」(2 ペテロ 1:17-18)。また、三人の弟子たちが受けた深い影響をはるかに超えて、この祈りの体験はその日以来、今日に至るまで、主の御足の跡を辿る者たちの心に大きな畏れを引き起こすものともなっているのです。

